桜

佐藤　美津子

三十年前　私は自宅近くの工場で働いていた　昼に仕事が終わり　エプロンを外そうとするとボタンがプッツンと取れて転がった　。自宅に戻り食事をとっていると　田舎に住む従妹から珍しく電話がかかってきた　。

昼間　私の実家が全焼し　父が焼死したという知らせであった　。頭が混乱するなか　それぞれの職場　、二人の子どもの学校に連絡　、慌ただしく支度をして　その日の夜行列車に乗った　。

深夜の三時半に金沢駅着　五時半の始発を待つ　そこから奥能登の実家まで　また四時間列車に乗らなければならない　穴水駅を過ぎた頃　そばにいた人がもうすぐ桜の名所を通ると教えてくれた　桜は大阪より一足遅れてちょうど満開であった　四月に帰省したことがなかったので初めて見た　線路の両側いっぱいに咲いている桜は人々の想いを大きく包み込んでくれるように見えた　肉親の死さえも　。

六十五歳であの世に逝った父　火元は台所のガスコンロということだった　火が着衣に燃え移ったらしい　酒飲みで家族に迷惑ばかりかけていた　最後には「家」まで持って行ってしまった　母は畑に出ていて難を逃れた　。

葬式は同じ村にある母の実家で行った　母は心労で首が固まり動かすことが出来なくなったが「借金で首が回らんというのは本当やねんな」と　気丈に話していた　。

終戦後　父は外地から戻り　母と結婚　四人の子どもをもうけた　。当時　漁業が盛んでほとんどの人が漁師になった　イカ釣り漁やサ、ケマス漁だったと思うが　、一年の半分ほどは海に出ていた　。

冬の間は家にいることが多く　いつも酒を飲んでいた　嘔吐もしょっちゅうで酒に強いのか弱いのかわからない　酔って一メートルほど積もった雪のうえに　倒れていたことも度々　酒飲みは怪我をしないように上手に転ぶ　風邪もひかない　。

昔　小学校の作文で「父が酒を飲んで　母とけんかになり茶碗などが飛んでいた」と書いたことがあった　先生はうまく書けていると褒めてくれたが　母からは家の恥をかいてくれるなと叱られた　。

独身時代　職場に父が訪ねてきたことがある　帰りに駅まで送ると　お金に困ってないか心配してくれた　人並みに父親らしいことを言ってくれると嬉しかった「心配ない　大丈夫」とこたえると「そしたらいくらか貸してくれ」　つかの間の幸せは崩れた　。

あれから年月は流れ　私も父の歳に近づいた　父はどんな思いで日々を過ごしていたのだろうか　呆れるばかりで尊敬とは程遠いものであったが　どんな人でも「あの世にいけば仏様」と言う　人を嫌悪しても何も始まらない　毎日元気に過ごせることに感謝していこう　。

桜も一年に一度めぐってくる大自然からの贈り物として眺めよう　。穴水駅から奥能登へ行く鉄道はすでに廃線となり　もうあの桜を見ることはない　。

「さまざまのこと思ひ出す桜かな」（芭蕉）